

*Suye Mura* と *Village Japan* —英語圏人類学における 2 つの古典的日本村落研究の比較から学ぶもの—

桑山敬己（北海道大学大学院文学研究科・教授）

エンブリー（John Embree）の *Suye Mura* と、ビアズレー（Richard Beardsley）らの *Village Japan* に代表される戦後の英語圏人類学における日本村落研究の決定的違いは、須恵村が行政村だったのに対して、*Village Japan* の舞台となった岡山の新池は自然集落だった点にある。つまり、調査単位がまったく違ったのである。そして、エンブリーは当時の日本の軍国主義のもとで、行政村としての須恵村の秩序が、そこに包摂される 17 の自然集落を飲み込むようにして形成されることに注目した。この点において、*Suye Mura* はラドクリフ＝ブラウン流の構造機能主義的モノグラフというより、レッドフィールドの都市農村連続説や農村部分社会論に影響されていた。脱農業化の時代にあって、両著書が今日顧みられることはめったにない。だが、以上の相違はこれまで看過されてきただけに、たとえ時代遅れと言われようとも、声高に指摘する価値があるように思う。

本発表では、(1) もし *Suye Mura* と同じような広域研究の視点が *Village Japan* に採用されていたら、ビアズレーらが調査した 1950 年代の新池はどのように描かれていたのだろうか、(2) 上述の視点の差はどのような方法論的相違をもたらしたのだろうか、(3) 私が 1980 年代半ばから 90 年代初頭にかけて行った新池調査は、振り返ってみてどのように違っていたのだろうか、(4) 2010 年から中西裕二氏と再開した新池調査に、以上の考察をどのように活かすことが出来るだろうか、などの問題について考えてみたい。